

阪神大震災後 1 年間のあゆみ

井 川 美 幸

1. はじめに

阪神淡路大震災（1995. 1. 17）から1年6ヵ月が過ぎた。今でも、当時のことを思い出すたびに戦慄が走る。当初は、正確な情報が入らず、事の重大さも認識できなかったで、次々に入ってくる情報に驚愕するばかりであった。数日間は水・食料の確保に奔走しながらも、頭の中では病院のこと、職員の安否などさまざまなが渦巻いていた。1月23日にやっと出勤することができた、誰一人けがをした人もなく無事であったことはなりよりであった。さっそく、図書室に入り、文献検索機を立ち上げてみた。無事に起動したことを確認し、安堵した。

この1年6ヵ月間の図書室復興について報告をする。

2. 地震後の取り組み

<1月>

緊急体制をとり、体制を整える。

医療品不足のため、重症患者は設備のある病院に転送。各労災病院施設より救援物質が届き、医療面、生活面で助けられた。内容は違うが、このときほどネットワークの大切さを実感したことはなかった。

<2月>

ライフラインも少し落ち着き、病院全体に余裕が出てきたころ、おおまかではあるが職員が自主的に図書室の整備を行ってくれた。

<3月>

図書委員会を開き、今後の図書室運営について以下の話し合いをもった。

◎本棚購入について

耐久性を重視した本棚の購入。移動書架の購入希望を申請したところ、予算不足であり、また、増築を行うため今は購入できないと返事があった。

◎図書室整理について

散乱している単行書・雑誌・製本をダンボールに梱包する作業を引越業者に依頼した。梱包の際に、和洋の製本と単行書の2種類に分けて詰めてもらった。

◎廃棄保存の基準を設けた

地震前は、本棚に余裕がなく満杯状態だったため、これからのことも考えて、廃棄処分を行った。15年間分（1965年～1979年）の本を廃棄対象とし、図書室前に並べ、各部長と相談のもと廃棄するものと保存し残すものを決定した。

◎雑誌購入について

これまでは、医師を中心に購入が行われていた。図書室は、本来、すべての職員が利用・研鑽するための、そして情報の中心となるべき場所である。そのための第一歩として、新規購読のアンケートを行い、広く希望を聞いた。

<5月>

いよいよ、整理段階に入ったが、単行書をどうするかという最大の悩みが残っていた。これまで分類は NDC で行っていたが、以前から NLMC に変更したいと考えていた。しかし、ひとりではなかなかできないため諦めていたところ、5月28日に協議会からボランティアの応援をいただくことになったので、無理をお願いをして、ベテランの方々に山積していたダンボールの中から単行書を1冊1冊取り出してもらい、NLMC に分類を変更していただいた。

皆さんのおかげで一日が終わる頃には、山積していたダンボールもすっかり片付けることができた。NLMC に分類された単行書はきれいに書架におさまり、本来の図書室としての機能を回復することができた。

<6月>

製本雑誌の整理については、院内の各セクションから応援を得て整理することができた。中には行方不明の製本雑誌もあり、管理の検討が必要であると痛感した。

<7月>

スペース面でのこれからのことも考えて、廃棄をすることにした。委員会で決定した15年間分(1965年～1979年)のすべての本を図書室前に並べ、各部長と相談をして、廃棄と保存を決定した。

<8月>

広く利用してもらう第一歩として、雑誌購入の見直しを行った。今までの医師中心の決定権を見直し、他の部署にも意見を聞く必要があることから、新規購読・購読中止のアンケート調査を行った。購入雑誌については予算を考慮しながら希望に添うように、なんとかすべての雑誌を購入することができた。

<9月>

日々変化する医療現場に最新の情報を提供

するため、CD-ROM の導入を検討した結果、Medilineを購入することになった。利用者からは日本語文献の検索も必要との声が上がリ、平成8年度予算で医中誌 CD-ROM の購入を決定した。

3. 設立目的に基づく図書室の関連性

『労働福祉事業団は労働福祉事業団法に基づいて設立された特殊法人であって、その事業目的は、労働省が所轄する労働者災害保健の労働福祉事業を適切かつ能率的に行うとともに災害防止のため必要な資金の融通をおこなうこと、労働者の福祉の増進に寄与することを目的として設立した(昭和32年)』とある。

神戸労災病院の設立は昭和39年であるが、図書室の記録が残されているのは昭和41年からで、図書室として機能しだしたのもちょうどその頃からと推測できる。しかし、設立当初の図書室は、労災関係の資料(民法、労働基準法、健康保険の解説)を中心に所蔵されていたようだ。

現在は、当初と比べると大きく蔵書構成も機能も変化してきている。これからも利用者の要求に機敏に対応し職員の「学ぶ場」「情報を提供する場所」でもある図書室の環境整備(蔵書の充実、図書室機能)をしていかなければならないであろう。今、司書としてその能力があらためて問われているように感じられてならない。

この9ヵ月間はたいへんではあったが、同時に新たな図書室の機能、蔵書構成を考える良い機会を得た時期でもあったように思う。これからの図書室運営に役立てていきたい。

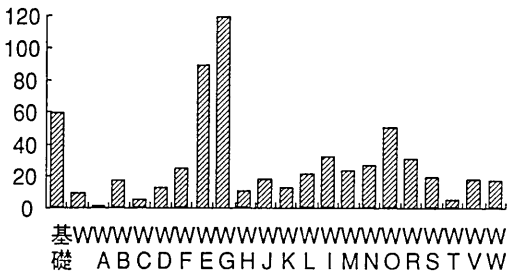
4. 蔵書状況の把握

今まで、蔵書状況が曖昧で自館の把握ができていなかった。しかし、NLMC に分類を変更していただいたおかげで、和・洋の単行書の所蔵状況が確認できたことは図書室構築に

おおいに役に立った。

ある。まだまだ、改善する点はたくさんあるが、神戸労災病院にふさわしい図書館をめざして頑張っていきたい。

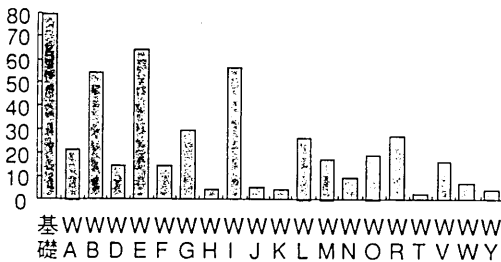
洋書



上記のグラフは洋書の蔵書状況を調べたものである。心臓血管系が最も多く120冊。筋骨格系が90冊、基礎は60冊、皮膚科学は58冊と続く。

最後に、協議会の皆様からたくさんの激励を受け、何とかここまでやってこられたことを、この場をお借りしてお礼を申し上げます。ありがとうございました。

和書



和書では基礎が80冊。ついで臨床医学53冊であった。

和洋とも、伝染病、老年医学、慢性疾患、放射線、画像診断、看護学、基礎でも、薬理学、寄生虫に関する本が少ない。

今後の購入の参考にしていきたい。

5. 最後に

図書室は不採算部門で、即結果は得られない。しかし、知識は採算できる必要な部門で